

116
3
199

新編
評版
大正
良土
産
下

奈良笥下目錄

卒五 白樂天

卒六 忠度

卒七 宋女

卒八 關帝廟

卒九 自然居士

卒十 鞍馬天狗

卒十一 龍田

卒十二 八嶋

卒十三 野之宮

卒十四 千手

卒十五 橋弁慶

卒十六 三井寺

卒十七 女郎花

卒十八 殺生石

卒十九 谷行

卒二十 鶴羽

卒二十一 玉鬘

卒二十二 柏崎



十三 山姥 十四 冰室 十五 鶉飼

十六 難波 十七 誓願寺 十八 定家

十九 半部 二十 春栄 二十一 梅枝

二十二 當麻 二十三 断風 二十四 蟬丸

二十五 志賀 二十六 葛城 二十七 夕顔

二十八 二人静 二十九 弓八幡 百 放生川

祭良翁下

六十五 自樂天

日本の智恵と云ふものなり小樂天来朝志の家事人
あはれなりと云ふは徳れ事なりは先を云ふなりて

るる中よ○唐人の事と云ふ言祭と云ふとては
も云ふとて云ふ所の詞と云ふ唐人は孫と云ふ
存家叔父も後めも樂天と漢籍との同義ありま
ゆくいもも物危但樂天が船乃中に通事あり
や通事なりと云ふはめが船のひと云ふ詞樂天を

安えは唐土の事として伝ふるは強き海くま
魚をれと言緒のせんさくおみほしけ後らら
ざはよむけかへりり○孝謙天皇は清寧
のちよしのちよふしど樂天萬年の最十代も十
代も別れりては事よるもやうあり
存極天皇の病癒えき八月四日崩下路ひ
ぬれど自樂天誕生の三年の節の道
いりてはよふきとくもたう○青海海
うひはく海を樂よまむ海も楽よ

韻号樂譜み取し伝書よ見てもえあつらひり
しちん或伶人は樂の事と尋ねれど海書
樂といふまゝおとらひり青海波あるごと
およき海波はたれ樂あり二人舞し

卒六 忠度

○今春日ウチ神体くしく事務是路もはま
八月のあひりえぬ後山れよもの花お後へて
ももともおまひりや風をきりたあーとんれ
内内風をきりてあつらひりねお

所を所して難^{かん}あし〇観世目^{アミ}タ月とあぐを
 ろみれとのが友^{とも}ふむらり^らの跡^{あと}みえぬ磯^{いそ}山
 乃よる虫^{むし}花^{はな}も後^{あと}履^ねして浦^{うら}風^{かぜ}までこゑく
 雲^{くも}よらけ^けもや音^ねきと^とたすまは^は用^{もち}心^{こころ}の跡^{あと}ね
 の那^な是^{これ}散^{さん}こ^このあひの徳^{とく}を^を程^{ほど}あしと^とり
 如^{ごと}き^き後^{あと}の^のよめと^とは^はい^いと^とな^なく^くま^まど^どく
 小^こそ^そた^たの^のひ^ひゆ^ゆ乃^の翔^とつ^つ花^{はな}も^も何^{なに}事^{こと}う^うや^や先
 後^{あと}何^{なに}して^{して}心^{こころ}して^{して}の^のま^まう^うと^とあ^あり^りと^と夜^{よる}の花^{はな}
 よ^よそ^そび^びね^ねと^とと^とら^らひ^ひく^くと^と海^{うみ}の^の開^{ひら}か^か乃^の跡^{あと}ね^ね哉^や

と^と何^{なに}事^{こと}と^と雲^{くも}み^みと^とけ^けだ^だや^や若^{わか}す^すた^たと^と浦^{うら}
 風^{かぜ}の^のよ^よう^う風^{かぜ}の^の音^ねた^たと^とた^たと^とい^いか^かも^も妹^{あひま}の^の事^{こと}風
 花^{はな}喜^{よろこ}め^めた^たと^とら^らつ^つも^もあ^ある^ると^とも^もい^いふ^ふ人^{ひと}又^{また}友^{とも}と^とあ^あら^ら
 乃^のす^すこ^こい^いた^たと^とあ^あら^らと^とも^もい^いふ^ふさ^さら^らの^の皆^{みな}秋^{あき}の^のあ^あり
 雲^{くも}た^たえ^えの^の風^{かぜ}の^の音^ねと^とい^いふ^ふ葉^は葉^はと^とて^てた^たと^とい^いふ^ふあ^あら^ら
 あ^あら^らと^とい^いふ^ふく^く腹^{はら}を^をほ^ほと^と〇^〇い^いふ^ふと^とい^いふ^ふ
 み^みま^まの^のあ^あら^ら夜^{よる}の^の物^{もの}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ
 州^{しゅう}の^のま^まい^いら^らの^のあ^あら^らと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ
 と^とて^て花^{はな}と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ

の瓶ももめれどてめしめ又家よりのものもいふ
 ごとく事ありあまひあまひ又はみよの事もいふ
 一人の作る物も同じ又家よりのものもいふ
 とうれず作源氏物語など長く「母」の事
 多く露づりのりも耳めらう事ありやてめしめ
 ちうひらきもりありや同く後元伊勢物語り
 みせよとして難い事ありや名阿まの事
 業へ各別あれど是もてちうひらきもいふ
 ○服と足まへめやれ類冊をけり礼事なり

徳宗澤海防ありあまひの事もいふ
 面白めぬもあはれどあまひの事もいふ
 このくもやそともあはれ度の時代め類冊ありや
 類冊といふもの伏見院よりちうひらき
 とつは徳と安訓しる人類冊とちうひらき
 ありあはれもいふもいふもいふもいふも

卒七家女

○ちうひらきあまひの事もいふ
 髪とちうひらき地は髪とちうひらき

續る哥代をよびてなほしめされたりやあめ乃
帝の御誓を吟うたむるるとしてあはれなること
り六條ゆかりと御入るるごとく御したるよませま
ふとてとらふるごとく御しめしめしとて一寺の
あつとぶとりの戸をむすくつめて懐きし御けあ
拾遺集の哀傷の部よよく作者標本入磨と
御門の御誓とあはし○ウ名地の段もれけりなを
あつとぶとりの御入るるとよみ地の段とよみ
りていへりつるあはれけりつるあはれなる事なり

卒八開寺小町

○衣通姫とて先恭天皇の后とて御す先恭
后ハ推淳毛二派皇子乃女忍坂大中姫とす御
安康天皇の母后あり衣通姫ハ其妹とて先恭
天皇の妃とすつとりの女御とも謂つる也一
大中姫と去子の御ありて伊豆國小流と是なり
衣通姫と寵をきくゆふ也但し後之后のものを
はるものさくづ○ヒテ先大の惟明が公がたり世
はるものさくづのちりつるなり一小文屋の康秀り之河

守ふなりてくらし時とてよはまの申
中のよと際とて申す物うぬれんと何
とていふぬぞ

五十九 自然居士

○観世目鏡法乃場とてぬれり恨尸に暮り
うり尸とてふ字とてありし今春日鏡法
の場とてぬれり恨尸に暮りうり
○観世目はありては鏡とてぬれり
とてありかのがら字といやと一今春日うけめど

あらのせもことこのかたははし○観世云此若とてぬれ
る小袖とめされうりぬれぬ人をもは
いふぬれぬとてはぬれぬ人をもは
○観世目くく物鏡業とてぬれり
ぬりぬれぬとてはぬれぬ人をもは
ぬれぬとてはぬれぬ人をもは
ぬれぬとてはぬれぬ人をもは
ぬれぬとてはぬれぬ人をもは
ぬれぬとてはぬれぬ人をもは

七十 鞍馬天狗

○是より履とたのむべく張良履とけむは
履とせらるゝいふ事あるが張良の事と
さきつゝいふ事ありなむぬ○師匠や坊主と
賞懸いふ事も大事はあらずいへて平家より
いふとせらるゝ事ありぬとせらるゝやれは
てあそちらういふ事もあらずいへて平家より
たすかたせらるゝ事ありぬとせらるゝやれは
やれはいふ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
たすかたせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ

かやせらるゝやれといふ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
○是までありやせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
なりやといふ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
新事といふ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
れはあつて頼朝つとる和なりとも和也
さきつゝいふ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
あせぬ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
まの川の流るゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ
一は平家とせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ事ありぬとせらるゝ

まづ骨とやらいふは計めく人な良國の二
 三ヶ國もとりてこそ將軍は金身ともいふべし
 杉野よのせめりて京めさへ守まらぬねま
 開東めくも春衡も後よのあてごうも敵
 あれど果は敵くは神めて日比の義経とふれ
 とまきぞ大天物守護あらしめ下れさし
 後ひ後てこそむじりの言もいふげき天物
 さへうそとつらうと程よんはうそはむなる那

七十一 龍田

○ウレノ神れまのよ通夜とて有つる昔とま
 びして神伝といふやみそりあはれ御
 かり衆方の現神とあのみ時真のま
 ぞあつらんとのまごうく愛母まてこの傳
 らまごうとまごうとまごうとまごうとま
 癒られ何とまごうとまごうとまごうとま
 ける昔と押付てつら事めら○謹上再拜
 再ねくと山河草木國去はつてはどの字も審
 なりぬくてあつたあつたあつたあ

七十八嶋

○今春二月を南の海原やとり子脇の津舟あり
 周急に程めくしめ羽もあし○所馬と行め打を
 日む佐者継信能忠後の矢片見めゆりてまよ
 りてりていとあまじき舟よる葉葉にうてれぬ
 洲の字はしきまなむしきもたきまぬてく
 よらうあまの船くまも娘よちよを給ひていひ
 ころし申もて馬もころしとあまらうと長
 又申すもてあまらうとあまらうと後と舟よる

菊の葉にうてれぬとあまらうとあまらうとあまらう
 花のくつたあまらうとあまらうとあまらう
 のうとあまらうとあまらうとあまらうとあまらう
 あまらうとあまらうとあまらうとあまらうとあまらう
 ひとあまらうとあまらうとあまらうとあまらうとあまらう
 事とあまらうとあまらうとあまらうとあまらうとあまらう

七十三 野宮

○親世目もくしめあまらうとあまらうとあまらうとあまらう
 かりあまらうとあまらうとあまらうとあまらうとあまらう

て頼朝よりとやせ程再よむの〇親世目^{シテ}ニラ
 唯今の何れ為るといふぞうしく何事ぞよとくはあ
 まさかの動^ふ動^{かん}のつゝまがれとや多く重衡は格^格格
 けかよむふそいり何あなだけよまがれとやされ
 く結ぶぞとくはあまよふ何人を重衡の
 三位れ中將あまがれとや人のあつひ殊よ宗茂
 高時朝のいふ人あまがれとやあつひもあまがれ
 又〇とま目^目何と千手れ宗兵と何の爲にぞ
 うしく何れ者なりとももとのあまがれとやまがれ

いふ一いひて出るやしく出河のりくさ度んず
 何とあまがれまがれと何の爲にぞと千手
 はあまの何あまがれとやあまがれあまがれ
 まがれはいつひて出るやしくと格^格格^格あまがれ
 何あまがれとあまがれあまがれ何と千
 手のあまのまがれとやあまがれと
 なり〇度まがれとあまがれとあまがれと
 風^風の追^追風^風白^白ひつるあまの格^格人よとあまがれ
 あまがれとあまがれあまの何つとあまがれあまがれ

子姪出するやうにしたいにせむるもはあはれ
 海に目なれづうさつね極あるべしとす○
 又たともども父命おぼるる佛像とありが人
 種と断し現當の罪とすするが業より我
 恥しうこそく河我をあらどれ悪逆とせぬ
 么ありつせども父の係よりあつとりのひは
 よや清盛の悪逆不道の人とは能とあつり身は
 ちりこれやどあつととあつり父の諫言とせ
 何うとせざるてなぬぬととあつり親は恥

悔きつらうとて申すの命なぬよ未練の物
 平生武勇とつたつて重衡ありとたのひと
 虫とつて

七十五橋并慶

○觀世音の事一たれとつていかに我
 公波とつていかにいかにたれとつていかに
 橋たつて後とつていかに○今春云云
 今春云云

白波の文鳥の花の五葉乃橋をなす夜を候
おらあやめうと何事ぞやと夕ぐわれ家の
多しうつくや葉にほく梅や夕ぐわれ雲の暮
をひるむく五葉のやうな梅を候

廿六 三半一斗

○キリかして侍ひらう御り親子は整つていせむ
と百葉の家と成よらう有難き孝あり
威徳ぞ多でたうりける世父母乃孝行とふ
事人の心んくんとく人商人よせうかうこれ

虚空より海より御園城寺より里をみ師と
粧へもまていせ侍ひらう母の葉にほく梅
とせせむは子の母に菊何と孝とらふく
ぞや情れりあは梅川ぬいふかき梅子の孝
とせ滑つ魚一母れまうて朝夕くし
とせおらあやめうと何事ぞやと夕ぐわれ家の
中男ひ我をよらう母に梅を候
文鳥の文鳥の花の五葉乃橋をなす夜を候
を威徳ぞ多でたうりける世父母乃孝行とふ

のふらふら川舟一葉のさくら花をよみて
なつてしぬ

七十七 女郎花

○藤のきくさう花をよみて
なつてしぬ
○藤のきくさう花をよみて
なつてしぬ
○藤のきくさう花をよみて
なつてしぬ
○藤のきくさう花をよみて
なつてしぬ
○藤のきくさう花をよみて
なつてしぬ

よめがよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ

七十八 殺生石

○殺生石をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ
○殺生石をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ
○殺生石をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ

七十九 谷行

○谷をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ
○谷をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ
○谷をよみてしるすに花をよみて
なつてしぬ

ねのふは思へく一唯思ひとぬかしく○ふきき
 作よそふもふとと免て作方母たうく身は
 難近れたるよおく母の現世よりのふんと思ひ立
 とあざうのつ也身おそや思ふまといつて又あ
 りてふもよりのお宿の向ふあふお物思ふと
 ゆめう一思ひつて思ひつて思ひつて思ひつて
 まてはくもあうり

唐衣まへいおいお海もくく程うも

あくさくもいおのうくもくあ那

とらふ源氏の弄よけ作者かふとよせてあく
 思ひとあふくもあうらよとあふくあおあはく
 身は難のれたるよおてあこの相おたあ意き守

半 鶉羽

始終葺不合尊れ事法りひふふ汁よて風流
 たりくゆきる靴もあし○アエラうれきう形や
 りぞゆらふげね陰よ露君して風も唄く真
 乃時神れ若とも待てらん老松呉服袴おひ
 三番の相の強月あふたまが先なるぞや後の

假令^{かり}公^{こう}あるべしとぞし但^たあひのうらひあ
 ど心^{こころ}成^{なり}けらるる程^{ほど}のあはねば何^{なに}成^{なり}た取^{とり}つてと
 けとりひてか極^{きま}めはきつるやけとて通^{とほ}盛^{もり}の
 ときも養^{やしな}れよと回^{まわ}りて百^{ひゃく}數^{すう}作^{しやく}るともあま
 作^{しやく}事^じとも回^{まわ}りていふれまじあるのなるべし
 志^{こころ}づるを得^えならん

全十一 玉鬘

○更^{さら}やあがねる塵^{ちり}れあふとどく物^{もの}公^{こう}の
 まづとて園^{えん}路^ろや玉^{たま}鬘^{まむら}のあめや塵^{ちり}れかある

花^{はな}へよとくどいひりまきつるば花^{はな}公^{こう}のとくふ
 花^{はな}公^{こう}よながとくといひけとあや一^{いち}園^{えん}路^ろと
 りつとてよ玉^{たま}鬘^{まむら}といひりまむら玉^{たま}鬘^{まむら}とや
 がんほ玉^{たま}鬘^{まむら}といふ花^{はな}公^{こう}よあめやといひ
 のまはあはつちぞ思^{おも}ふ事^{こと}と知^しらざりてとあま
 よつ及^{およ}ぶと玉^{たま}鬘^{まむら}れあめといひりまきつる花^{はな}公^{こう}の
 垢^{あか}といふるや但^た髪^{かみ}の赤^{あか}きとあまのうらつと
 まくとよとまむら公^{こう}孫^{まご}れいひりなむら

全十二 柏崎

○あてや寂期さびきのかりゆいからる事ことの富とみに
 びる事ことはなれ字あざを付つし〇又さうもりなごの
 折せ言ことばもいいでんこ小乱舞こらんぶまよてんをきんを
 遣つかひとれ取出とし衣へん後ごうらうらんとあつて
 引ひ獲とらふ抱かかりしと愛あい入いりし心こころぞやうま
 武士ぶしあれどとて酒盛さか乱舞らんぶあつに遣つかれ入いり
 ありや能のう小甲せうこう鬼おにと舞まいりし心こころぞやうま
 切きそぶらうごさなご心こころもぞうし但ただび抱かかりし
 ちうひま切きの代しろは皮かわとの遣つかれとあつしつらやあつ
 舞まいりしと乱舞らんぶまよてんをきんを

全三山姥

○是こゝは山姥やまばの御事みことの百ひゃく山姥やまばとてあつる
 持も女めよとて取とりし心こころは親世流おやしゅう乃の名な系けいよとてハハは持も女め
 本もと若わかと山姥やまばといふ極ごく今春こんしゅん日京にっけい童子どうじの舞まいり
 百ひゃく山姥やまばといふ心こころはせめてれりし心こころは
 ちとちと名なと口くちふりし心こころは山姥やまばの山姥やまばりす
 ちとちと名なと口くちふりし心こころは曲舞まがま小作せうさくり心こころは
 系けい童子どうじれ若わからふ百ひゃく山姥やまばとてあつる心こころ

とびそりー○まごりあづら雨の網子さくらや
 抱み体もくむさぶ鞠のつれ氣味もろし時れ鞠
 子どらうく抱みさすむれがとりだはしる
 やとり魚ぐしやの字耳ふき飛してらまじまるし
 ○アヒラ 松風とくしよ 雲雀れ色絶くはるる
 子先さへさる曲水の月ふあ絶る山うれ鞠
 けるもなれよ色絶二つ何るもぞや絶く
 きね鞠又うけてこころる鞠も月ぐさるらる
 勿備く是へあまりれ事うそとくくはるる

全四 氷室

○親世目解ぬも幸く小指ふ氷の袖乃付侍れ
 ぐこいちも是た在茶どらる事へ今らどあぬぬく
 いりゆる梅へみずらうま夏まで氷れ清がる體
 新戸へけ辰跡るあはし○とまき云ハ解是ハけ取
 ちどあへは若くそいひゆる梅めより春も夏
 氷れ清がるいそれと新戸へ大庭の口よりとや
 一は民よむらひくらすあまくりーと見やうとと
 成程りー結らば口小け所らどめくは若くは

まのりんごんをりしきんはあ入始て来る者なり
とつみ魚をい事ん

十五 鶉飼

○觀世曰婦づりぬきて魚がらきごとあまう野で
しそ色くとりてしむらちをわおのめいと相お
しゆきを魚とあられとつんをぬすむし事あり
今春ゆを色のとつり

十六 難波

○ワ解あしごやれ徳本こそわがまの申お徳本
わがまの中あてしんまはえゆるんこそと入
しほの何事ぞや都てこそとつみとみんハト
みゆえんをくてもあつぐてし

十七 誓願寺

○ワ解あてく徳てしんをせアウん書れ物ごつり
あつバ徳ゆしんをせアウんをくつるたごたれハ
四句の文と書てしんをせアウんをくつるたご
徳てしんをせアウんをせアウんをくつるたご
しんをせアウんをせアウんをくつるたご

希とや世の字なむびて耳おこしとくあり
なねどなるぬ事なりや

八八定家

式子内親王の後白河院の皇女也定家母利子の
門ありきればいぬよまま師僧是乃なりやとも
ありしなり密通の事なりたるのめきとも人
懸り作ては物ありた真偽とれとあり
とび〇今たくばいふと我も式子内親王
是までいふては事なりけりや

いと式子内親王とやそまうへもふ自身
はたはより我も式子内親王と傳はるぬ物なり
かくらぬとびんとたればいぬよまま師僧
はるふ長く一なりけりやまま師僧は
るうれいひもいぬよまま師僧は

八十九半部

〇てはふとれどたあやもがほとあうと世
の佛母花とそまうへは尋の何と聞あやゆりく
かくの強よ作り入るるそや是の遍照僧伝う語

哥よそ折かりとらへも房たぐさやけつるまあうら世
れ松より花よそまうらつりつりも房たぐさとりのひ文
よふとらうたさう何おうきとてあうらとあるふ
花よそ母よりといとらも物うたさひあうらとあう
どとてあうら花よけもかたたるのばうとてあうら
もあまきれとてつるあうらよの遍あま照あまうみた
あうらとわりのあまの作り入らう

九十一 春榮

○觀世くわんせいをまごてらうくまうら房たぐさにせしむ

屋やうーくれひふよそまをあうらうらうく
まうらとあまのつりーとせまうらとやにせれ
といとねむたす守まも○觀世くわんせいワキわきあまあま春榮はるえ友の
れもまうらとせまうらとあまのつりをれは命いのちと
とすかりとらうとせれがーやうけ一跡せきとつ
がせやあま友の念ねん致しとていれ命いのちとすかり
くうーとていれおあまのつり命いのちもま守
うり命いのちとていれあまのつり命いのちのつり

九十一 梅枝

○觀世曰^が 富士は俊と結らるる糸^{いと} 依て^よ 濱^{あま} 安^{やす}
ら^ら びよ^よ 思^{おも} ひ^ひ 憂^{うれ} せと^と 結^{むす} りて^て 糸^{いと} せぬ^ぬ 是^{こゝ} であ^あ
ら^ら び^ひ 思^{おも} へ^へ 憂^{うれ} せ^せ 結^{むす} りて^て 糸^{いと} せぬ^ぬ 是^{こゝ} であ^あ
首^{くび} 尾^び さら^ら り^り ず^ず 又^{また} やすの^の び^び ぬ^ぬ れ^れ も^も ひ^ひ ぬ^ぬ の^の
字^じ も^も 無^む 益^{やく} あり

九十二 當麻

○觀世曰^が 解^と け^け け^け 尚^{なほ} 麻^ま の^の 曼^{まん} 陀^だ 羅^ら の^の 體^{たい} 委^い ぬ^ぬ 地^ち 結^{むす}
く^く 採^と け^け 尚^{なほ} 麻^ま ぬ^ぬ ま^ま ん^ん ぐ^ぐ 程^{ほど} と^と や^や の^の と^と ひ^ひ ぬ^ぬ れ^れ
と^と も^も ま^ま ん^ん ぐ^ぐ 織^{おり} け^け 糸^{いと} 子^こ 細^{さい} 蓮^{れん} の^の 糸^{いと} と^と 深^{ふか} なる

極^{たぎ} 子^こ と^と 朽^く の^の 糸^{いと} たり^り と^と 海^{うみ} 人^{ひと} ぐ^ぐ 程^{ほど} の^の り^り す^す さ^さ
と^と 解^と け^け 是^{こゝ} へ^へ いく^{いく} 程^{ほど} 作^{つく} り^り や^や ぐ^ぐ 今^{いま} 春^{はる} よ^よ 今^{いま} 春^{はる} よ^よ 今^{いま} 春^{はる} よ^よ
の^の ま^ま へ^へ け^け 洞^{ほら} あ^あ 糸^{いと} あり^り と^と あ^あ や^や ま^ま ん^ん ぐ^ぐ 糸^{いと} 深^{ふか} なる

九十三 断風

○乃^な の^の 名^な 跡^{あと} ある^る 都^{みやこ} の^の 糸^{いと} 遠^{とほ} け^け り^り 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る
此^{こゝ} あり^り の^の 海^{うみ} と^と 結^{むす} て^て 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る
舟^{ふね} 出^い て^て 波^{なみ} 踏^ふ ら^ら ぬ^ぬ の^の 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る
糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る
糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る 糸^{いと} 深^{ふか} なる^る

二のそらうと望みの余の御ふりして交ひ○ワキ師
 身は敵の都よまゝ一ゆす相挫さる時こそ親の
 敵よとく相換入道言時在系せしきくるるは
 高侍ハ正和五年七月年十也よて執権文保元年
 三月相換さるは但寸正慶二年九月廿二日鎌倉東
 勝寺よて生害よ及ぶまで上流の汝法るし位
 主はの六波羅に奉行とてりひつるやされん
 お挫きとらうくはる時都てさあ能よはかえ
 くるおめがくれとんよとくおとて作らんと
 以

九十四 蟬丸

○能人臣おごんまじらで雲舟の空とま
 よひきてひ免よものもれ字あくれむは小
 りぬ字と入らりも乃字もつらひ屋うさ
 ぬ作志とカんえきり

九十五 志賀

○ぬ一まごなりつらる出人の薪乃芥れ形さ
 目と出人の薪とらひつらるぬをく薪乃芥
 とらうもきるるもむくぬ芥れなりは良とら

うきうきの何事ぞや 芥子なうらたてと云ふありや

九十六 葛城

○まづうらたて 葛城の神は岩橋うけきり
其とがあらして 明玉の索うとて 身と戒めて今よ
らうとて 絶ぬあり 肉くるとの字こそしはるを
うらたてぬ 二川の是れとほ 後れ戒めて
まを存せうとて 身といましめ 今よは
み絶ぬとて いひきり

九十七 夕顔

○解けく 髪とははげくとも 中はうとて びあや
と物と 尸とぞとて いひきり 何と何と
とめく 也都れ 申して 西城をまて づくと
か

何國うらたて 葛城の神は岩橋うけきり
其とがあらして 明玉の索うとて 身と戒めて今よ
らうとて 絶ぬあり 肉くるとの字こそしはるを
うらたてぬ 二川の是れとほ 後れ戒めて
まを存せうとて 身といましめ 今よは
み絶ぬとて いひきり

九十八 二人静

此篇一巻の内せりぬつたは歎世流しと云ふ
 事ありくごとく一〇一目短うして我跡と
 てさび給くとよく保つての字つぎごとく
 目短との兒我流しひてとりあへざるなり
 ては字はづく事歎世と云ふ事あり

九十九 弓八幡

○都よあつり非勅とあつてくを奏しあは
 としごとおらと音楽の用えて異香薫す事

実あつてなほ奇物うかひなるとあつて
 とき何事ぞや実香薫じはく実あつた事
 とあつたれぬり

百 放生川

○実今とてと非れ代の流束はわくつた事
 といへど虚元よ夜神よ来れ安えそ実香薫
 ともあつたあつてあつた奇物うかひなるとあつた
 事ありきり放生川とあつて弓八幡を作り
 とあつた八幡とあつて放生川とあつた事あり

八幡の由事といひあぐつゝ廻つたは又船なる事
多し中めと実者董どある実あつてなる
とどくろみと因づるあ方よめをちがをびあり
それと亦徳のおぢらうへ飛ゆるもも七世河の目
とあ方元お石清水の由事あはれがわまり狼藉
あつてなほ

貞享四丁卯年

九月吉日

明治三十五年六月廿五日印刷
同 年六月廿日發行

京都市上京區二条通御幸町西

訂正兼發行印刷者

檜 常之助



116
3
199

